

南原中だより

米沢市立南原中学校

学校通信

2018. 7. 3

それぞれの思いを込めて・・・

7月1日猛暑の中、本校62回目の創立記念式並びに閉校記念碑除幕式を行いました。同窓会副会長 遠藤勝幸さんの古き南原中学校の様子を偲ぶお祝いの言葉、熊澤南水さんの壮絶な生い立ちと、「念ずれば花開く」の座右の銘にまつわるお話、父母と教師の会会長 安部直人さんの閉校記念碑に込めた思い、今野貢さんが心を込めて作ってくださった「南中プライド」のモニュメント、それぞれの思いが伝わりとても心に響く時間を過ごすことができました。暑い中ご臨席を賜りましたご来賓の方々、早めに来て閉校記念碑除幕式の準備をしてくださった実行委員の方々、本当にありがとうございました。



【熊澤南水さんのお話より】

私はたいへん裕福な家庭に生まれ、5歳までは東京に住んでいました。第二次世界大戦終戦後、一文無しになった母が6歳の私と3歳の弟を連れて母の実家の青森県津軽に帰ります。祖母の家の物置での生活は悲惨そのものでした。冬になると夜は零下25度の世界です。おいてあったラムネやサイダーの瓶が凍り、「ピシっ、ピシっ」と音を立てて割れるのです。学校でも孤立し、雑貨屋を営む母の苦勞を知っているので、月10円の学級費を払えず、先生に催促されても「忘れた」と言い訳をするしかありませんでした。そんな学校生活5年間は楽しいことなど一つもなく、「いつか東京に帰りたい」とずっと思っていました。「念ずれば花開く」とはこのことです。亡くなった父の東京の知人が養女にしてくれました。6年生から東京の小学校に転校しました。その最初の日の1時間目に私の人生を変える事件が起こったのです。国語の時間にあてられて本を読んだ私を見てクラスが大爆笑をしたのです。

「そばによるとズーズー弁がうつる」と言われ、だれも私に声をかけてくれませんでした。その時に私は「言葉で笑われるならいつかこの言葉で生きてみよう」と誓ったのです。その後浅草の老舗洋食店に嫁ぎました。祖母は近所でも評判の「難しい」人でしたが、大人の顔色を見ながら今、何が必要かという「空気を読む」ことができるようになっていた私は、祖母に最後まで仕えることができました。

皆さんには言葉を大切にしてほしいのです。体験を経た思いが込められると言葉は生きてきます。その時わからなくても、細胞が言葉を覚えているのです。それが言葉の持つ力なのです。ぜひこれからも「言葉を大切に」して生きてください。

ひとり語り：山本周五郎作「日本婦道記」より「不断草」

<あらすじ>

若き日の上杉鷹山公の政治改革の陰で苦勞する家臣とその妻を描き、そこに目の不自由な姑がとてもしい形で二人を包む、とても心温まるお話。